特1
2230

妙藥博物筌

やまけふこにて

五

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230

ガラス使用

和哥 新選二葉草 有賀長伯著 小本二冊

一名哥道早指南といふ

哥の題を記しよこ方詞よせ説哥を加へるけ
をしるしたる本なり○題を見て哥よむべき
趣向うる時ざる附大に益なり○祝の哥よむ
と記すいの部にて祝といふ事にこれば初めに
祝にあんゆる詞を出し次によせの詞をのせ
ま次にふこと合を出しいづまもさけをしるし
説哥故事をのせ○天地日月より草木
魚鳥に至るまで右に准じて悉く集む是迄
哥学社書多くなれども世本のおとく題をあし
あんの詞よせの詞よこと合と委しくいざし
たるは外に類なしよりて初心の人は勿論
哥學社流なりとも不持して失忘に備ふ
なし○下の事にて初心のまうらぬ哥の詞を
集め委しくすけ記し説哥枕詞をもを
加ふ其外よこうこ口傳なるのものなどくのに

天地惑門珠 全二冊 天地日月風雨雷
雪より地震流火
ろくろ首其外世にあらうく合点の由のばふ
るを委しくすけをしるしたる本也月なりが月
の光るすけ○水の精といふ事○月蝕○月桂の由来
○名月をもけ迄委しく記に余は准じてしるべし

菓湯料理献立集 全五冊 当この料理並菓席
の料理思ふ法なれば
世書は食席料理を来の趣向をかるくいたし
まふ人にくも心安く出来くちそうになる料理
方をしるに○正月大服の菓食の式より十二月
迄月こふすけ申し○終りに貴人へさし出に料理法
式を出しくなるとに其外菓席まびまびから
ざるの心得菓の法式食席料理道具は悉く図
を附し料理につかひしものへしくたくさへ精食物
けし合の品まで集め万事の菓席なる其料理に
拘る一切のものせ申したとへ菓席にならずとも此出
を見て料理をあらはるが見へよろしく出来申し

やまけふこ白て六目録

やの部

○湯火傷の薬 九方 十四丁メヲ
○同 同
○同 爛れたるを治す 十五丁メヲ
○同 同
○疫病を辟法 三方 同
○やこめ丸薬 十六丁メヲ

国立国会図書館 タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○矢の根ぬき薬 二方 同ウ

まの部 ぬむしくひへの部にあり

○万能膏 十七丁メヲ

○金絲万應膏 同ウ

けの部

○毛生薬 紅毛流 十八丁メウ

○同 二方 同

○毛髪生ずる奇方 二方 十九丁メヲ

特1
2230

○下疳内薬 二方 同ウ

○同愈薬 二方 廿丁メヲ

○同膿吸薬 同

○同付薬 瘡にもよし 七方 同ウヨリ 廿二丁メウ

○夢想下疳膏薬 廿二丁メヲ

○下疳瘡薬 同

○同骨痛を治す 同ウ

○同男根に疵付くるに秘方 二方 同

○血塊の妙薬　廿三丁メヲ
○け虫に螫れたるに薬　同ウ
○下血乃薬　二方　同
○同蒸薬　廿四丁メヲ
○同円薬　三方　同ウ
○痤癬　廿五丁メヲ

ふの部　婦人の病大概を記す。産前後ハさの部よくハし

○月水定より早ハ血の實と知べ　同

○月水久く止らざるを治す　同ウ
○赤白帯下久くゆらざるを治す　同
○赤白帯下年月を経て止ぬを治す　三方　同
○こしけの治し薬　廿六丁メウ
○帯下の妙方　廿七丁メヲ
○月水久不通口鼻より血出るを治す　廿七丁メヲ
○前陰へ蛇入るを出す　同ウ
○産後前陰損腟痛を治す　同

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○婦人万病妙方　同ウ
○山田振薬　婦人血のみちを貸はし　廿八丁メヲ
○同方　同ウ
○婦人帯下治し難に用る方　同
○婦人故なくして小便に血出るを治す　廿九丁メヲ
○黄胖病の薬　三方　同
○河豚の毒に碎ける薬　三方　廿丁メヲ
○花蛮の螫るを治す　同ウ

○風毒腫の薬　同
○船暈きぬ薬　二方　同
○船暈するを治す　廿一丁メヲ
○葡萄といふ疔を治す　同ウ
○袋打の妙薬　骨中る切打るをいふ　同
○腹痛を治する方　廿二丁メヲ
○心腹痛諸薬効あらざるを治す　同

この部　こしけれ療治ふの部にあり。喉痺の部考へ合すべし

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○喉痺喉風の吹薬　同ウ

○喉痺の薬　卅三丁メヲ

○喉風の薬　同

○口中の薬　同

○口舌瘡を生し唇燥咽乾舌強縮等の証をを治す　同

○同口中一切によし　同ウ

○歯をぬく薬　卅四丁メヲ

○ゆるく歯を固る薬　同

○口瘡舌破を治す　同ウ

○咽喉腫痛飲多三日通ぜさるを治す　同

○同腫塞呼吸通ぜさるを治す　同

○喉腫痛によし　卅五丁メヲ

○舌に瘡生しさるを治す　同

○咽口中瘡生しさるを治す　二方　同ウ

○小児舌志てぎを治す　二方　卅六丁ヲ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230　ガラス使用

○ 歯をすゆる薬 同

○ 歯より血出疼痛を治す 同

○ 風牙を治すること立処に効ある薬 同ウ

○ 蛀牙漱薬 同

○ 牙落後生る方 卅七丁メヲ

○ 走る牙痒を治す 同

○ 同 含薬 同

○ 唇に裂大便秘結し脛により涎を

流すを治す 同

○ 神痰固歯散 虫を殺し歯を固白し身終まて歯の患へなくしむ 卅八丁メヲ

○ 喉より血出るを治す 同

○ 口中含薬 万によし 同ウ

○ 大舌を治す 舌俄に大に腫てとりてこれを俗に大舌といふ 同

○ 長舌 木舌也舌大に腫かくなるをいふ 同

○ 同 卅九丁メヲ

○ 歯くさの含薬 同

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○歯くさに血なくて痛に付薬　卅九丁メヲ
くちびるやぶれいたむによし
口中やぶれたるによし

○同　内薬　同ウ

○咽へ唐瘡出て痛に吹薬　同

○舌腫て口の中に満るを治す　四十丁メヲ

○舌の上に瘡出又根に為も治す　二方同

○小舌乃薬　同

○含薬　同

○口中臭氣を去　四十一丁ヲ

○同　同

○口中一切の痛に薬　同ウ

○口中一切の名方　口中方によし　同

○上下の腮に瘡生したるを治す　二方同

○重舌　四十二丁

○歯くさ舌の上下腮より血出るを治す　同

○口舌咽喉腫痛に含薬　同ウ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○一切口中によし　四十二丁メヲ
○小舌の薬　四十三丁メヲ
○重舌の薬　俗に小舌といへ　同
○口中の薬　口中一切腟痛によし　同ウ
○馬牙疳　口熱　歯痛　歯齦腟
○蟲歯等を治す　同
○歯くさを治す　四十四丁メヲ
○口中含薬　同

○乳香散　口中一切によし　同ウ
○頬腟たるを治す　二方　四十五丁メヲ
○歯冷て痛を治す　同
○歯の根ゆるぎ痛を治す　同
○歯の痛を治す　同
○同含薬　同
○蛀牙痛を治す　同
○臑痛を治する妙方　四十六丁メヲ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○卒に色出ざるを治す　同
○瘢の薬　三方　并ニこふの見やう　同ウ
○瘤拔薬
○香煎の名方　四十七丁メウ
○腰痛を治す　二方　同
○氣滞腰痛腎虚腰痛を治す　四十八丁メヲ

ての部

手負の内薬　同ウ

○同氣付祕傳　四十九丁メヲ
○手負にも血止にも用る薬　同
○手足を挫くるに付薬　二方　同ウ
○手負の生死の見やう　同
○内口鼻より血出るを治す　五十丁メヲ
○内鼻血を止る薬　同
○内血を吐を治す　同ウ
○手足忽腫痛を止む　同

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○手負によきあいす　同
○同　内薬　二方　五十一丁メヲ
○同久く血を吐不止鼻尾よりも血出るを治す　同ウラ
○同胴へ血の入るを下す　同
○同筋にしし　五十二丁メヲ
○同　付薬　同
○同血内へ引外へ出ざるを治す　同
○同　同

○手足に海め出又ハすりむけるを治す　同
○癲痫妙方　同
○癲痫石風粉を治する奇方　五十三丁メウ
○癲痫を治する秘灸　同
○同妙薬　千金勝寶丹　同ウ
○大人小児癲痫を治す　五十五丁メ
○同妙薬　同
○鉄炮に中りうるを治する方　同ウ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

藤 呂求子見隆纂輯
長 恭齋丹堂校正

やの部

○湯火傷の薬 九方

一 黄連粉にし香にて解付べし 妙なり

一 又方 南天の葉をよくすりて付べし

一 又方 黄栢 くろやき 男には女子の小便にて付女には男子の小便にて付べし

一 まつかさ くろやき 研にて解付べし

一 桐の木 くろやき 油にて付べし

国立国会図書館 タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

一又方桑木黒焼明麻の油にて解付べし
一又方于菜を粉にし油にて付へし
一又方薯蕷をおろし付へし妙なり
一又方兎の毛を焼て黄柏を多にて
出し。其汁にて付べし

○湯火傷奇妙の方

一蕎麦の粉黄色に炒多にて解て傳へし
其愈るを神のことし

○月爛れたるを治す

一串柿の核黒焼 筍 北皮 日 葛 各等分
に合せ。鶏卵白にて祓り付べし。是川の白
にても菜 却かわりに入ねる。二三日過ては黄な
る所をも是川入べし

○疫病を辟法

一宣聖辟瘟方 臘月二十四日寅時井華
水浄器に入。人数の多かを量て此水に乳香
を浸し置。明年正月元旦寅の時右の水を

温め。幼少の人より始め大人に至て次第に乳香小さ塊を一ッ口に入右のあくゝめたる水を三呷咽下すべし。其年時疫を患るゝ事なし

○又方

一凡疫癘盛行時若街路へ出るには酒を能程に飲て後出べし。又家に回時も先酒を飲て後外の食事飲物を用ゆべし。かくのごとくすれハ自然に乳壯にして瘟疫深るゝなし。但し酒過て碎かどに飲べからず。如酒を飲ことあらハざる人ハ外へ出るにも帰る時も生蒜と蒜とか吃てよし。或蒜頭にても鼻孔を塞もよし

○又方

一家内の人傳染ざる法　雄黄五分　赤小豆十分　蒼朮十分　米泔に浸し黒皮を去陳壁土に交て炒さ用し土を除去

右三味細末し壹分かどづ水にて服すべし

○やゝめれ薬

一胡粉　白礬焼て　龍脳か

多を蛤貝に一ツかど入絹にて漉し。一日れ中
に六度も仰けてさすべし奇妙れ秘方也

○矢の根ねき葉

一蝸蛎を秋の末にとり陰乾にして蜜椀の
さ〇の黒焼 梅のすそくゐにおしまぜ
疵の口へ付べし

○同

一沉香 雌黄の灰 蝸牛 黒やき 各等分
爪實のごとくに丸じ。矢の根ぬく時ハ巴豆

の油にて志めし用

〈まの部 液むしくひへの部にあり

○万能膏

一肉桂 地黄 芍薬 茴香
甘草 白芷 大黄 各五 丹 百目
煉やう
胡麻油七合に右の葉を浸し表ハ三日 夜ハ
二日 秋ハ三日 冬ハ六日をき。扨炭火にて黄色
に成まで煮じ布にて漉し滓を去。丹をか

しづ入そろくと黒くなるかど蒸。丹のあるかき付あぐべし

○金絲 万應膏

一蛸蚣 或ツ黒焼 巴豆 ある皮をとりてかし焙里紙包紙油をえ 香皂 十五あふる

乱髪 十五男女乃を黒やき 穿山甲 十七五黄に如紙あぶり 柳皮 ある くろやき

革麻子 十五皮をとり去すり油とる 本鼈子 十五粒皮をとり炒とろす 清油 六十目

蒼耳草 十五中秘よやく 黄丹 十五土鍋にてよくいりてあつきるに入

楡白皮 ある あふる 乳香 十五まつ分ハ焼まつ分ハ其まく 没薬 十五同上

右十四味の内へ竜脳 ある 麝香 ある 入べし

右煉やう

乳香 焼 没薬 焼 二味を砂し蒸て中煉の時入。黄丹ハ炒て煉終る時に入べし。扨殘里の葉ハ油へ赤入てくより。時和まで蒸。和ふるくと煮てさまし蒸て布にて こしよく煉ゑへをうし見て。丸くかたまる時火を去てさましゑへ入冷るかど ゑを磨べし

〈けの部〉

○毛生菜 紅毛流

一蛙の皮 黒焼 蝸牛 黒焼 菰 黒焼 皂角子 ツ五
犬ひり茅 二五 榕汁 三五 生薑汁 二盃
右二色の汁を合せて椰子油 壹盃 入油等分
に煮じ布にて漉し右又色の菜をまぜ
其後唐蠟を入て能加減に煉なり

○同

一梧桐皮 壹五 一名あをによろりこも云 桑木皮 壹五
右各に出し付べし。腟抱の痕にて禿たるに

も付へし。髮の赤も出し煮じ出しあしらへべし

○毛とへ菜

一麒麟竭 壹匁 阿仙菜 壹匁 蒲黄 壹匁
膽礬 壹匁 附子 壹匁
右粉にし付へし。疳瘡の類にもよし

○毛髮生する奇方

一蝙蝠 くろやき 菰の中の黒き粉 各等分
胡麻油にて付へし二三度付るに毛髮生ぜ
すといふるなし。切に試し菜なり

○同

一 鼠の子 毛いまゝ生 さるを用 蛭 腸を去 蔬の根

古何也も黒焼にして胡麻油にて付るに妙也

○下痳 附 茶

一 山坂茶 五匁 牛膝 五匁 黒大豆 五匁 別て 燈心 六寸

水を飯椀に三盃入て盃に煮し二度に三盃入て

盃に煮し三度に三盃入てぶんにせんじ用也

○同

一 南天の葉 生 同 黒焼 黄栢 生 三匁

粉にして付べし

○同 愈茶

一 川蜷 黒焼 胡麻油にて解付べし

○同

一 蝸牛 黒やき十匁 黄栢 粉 白粉 かし

古粉にして捻りかくる

○同 膿吸くすり

一 赤蓼蠃 蓼つけ黒焼にし 黄栢 香色よい

とべこ貝 いろにも古きしやれこるを黒焼にし

古調合し付べし

○同付茉　瘡にもよし

一蓮の葉　黒焼　くげきつよきにハ蟾蜍を黒焼にし古蓮葉の三分一加へべし

○同

一銀薄　金薄　古茶　烏賊骨　古きを各等分

膽礬　よく焼こんこよし初ハ耳クきすかかど入愈る

古汁のこ海るかど捻りかくべし

○同

一玉莖の上に瘡を生じたるに鷹爪輕粉鶏卵殻各等分細末し旋煎じ過し清油に調て塗置し。又陰莖大に腟たるに蒸菁根を生にて搗て塗べ又爲鞭茉を搗て塗もよし

○同

一麝香　麒麟竭　竜脳　辰砂　阿仙茉

右細末し捻りかくべし

○同

一辰砂 其まゝ 寒水石 七分ヌリ 鹿茸 焼 其まゝ 硫黄 其まゝ 白粉 其分 朱 其分 阿仙茶 ヌ分 沉香 七分ヌリ 焼ちらず

右黄して洗ひ乾けをとりて付べし

○同

一南天の葉 黒焼 南天の葉をもて出し 右乃黒焼をの面て付べし

○同

一阿仙茶 沉香 黒焼 帝君子 火よくべてやく 各其数

右沉香の目に應じ外の茶乃目をかけべし

百人の内九十八人まで瘥。大秘傳の言なり

下疳をわきへちらす海じきと思ふには梔皮を

一味加ふれバ甚きへちらず

○夏忠下疳膏茶

一松脂 大 麒麟竭 小 海んでいか油中 白粉 小

靈天蓋 小 又味 熬じねる

○下疳瘡茶

一乳香 没茶 阿仙茶 土龍 黒やき 其分ヌ量

右粉にし白湯にて用ひ。付茶にも竜を捻かくべし

○下痢にて骨痛を治す

一海人草　牛膝　苦楝皮各四分　上古茶　壹分

右粉にし●是れとに丸し一度に二十粒つゝ日に三度山梅菓を用ひ二盃入一盃に煎じ。二番に二盃入一盃にせんし。七日用て愈るを奇妙なり。

○下痢　并ニ男根に疵付たるに秘方

一女の死骨を粉にし　白粉　黄柏の粉合せ付べし妙なり

○同

一久年泄土器　白焼粉　田螺　白焼にして　卸分

煙粉　生にて　各粉にし　膣拘にふりかくべし

汁多く出てつゝぬ物也　陰分切て振かけ菓付　膿汁止りたる時水三升に古きぬかみそを湯に立洗ひ。其まゝ右の粉菓を付べし。遅く付れハ痛出るなり。菓付ぬうちハ洗ふべからず。汁無りて後一日に一度づゝ洗ふべし妙なり

○血塊の妙菓

一合歡木の葉　壹匁　茄子の蔕　卸分　黒焼にし

蓬のけまて消し粉にし白湯にて用也

○けしに蟄しうるに茶

一又八箱をすりぬるべし

○下血乃茶 熱毒をつくし毒氣腸胃に入或ハ酒を過し眞鳥を多食し血を引て大腸に入ゆへに血を下し血を糞す

一天南星炒て山梔子各等分 甘草かし

葱の白根 かしらに切 三ヶ入 葱じ用

○同

一葛の花●是ハどに丸じ湯にてつよきに

ハ又粒三粒用也

○同寄方

一茄蒂を黒焼にして飯湯にて一度に二ヶ

かとづく用也。又右の黒焼に山梔子炒加へて細

末し丸茶となし米湯にて用るも尤寄也

○同蒸茶

一木鱉子三ツ皮をさり杵碎泥のごとくは

て百沸湯を器に入此内へ右の茶を入上に

坐して蒸へし。一日に二三度して瘥

○同 円茱

一 齒朶 こいふ茱をせんじ服べし

○同

一 槐角湯

槐花 栢葉 枳殻 黄芩 各等分

甘草 かし 煎じ用

○同

一 阿膠湯 熱毒胃に入く膿血を下を治す

黄栢 大 阿膠 大 山梔子 中 黄連 中

槐角 大 甘草 少し せんじ用

○痃癖 ま痃癖にて死せんとするを救ふ俗の肩のつかへたるを痃癖といふ

一 青松葉を煎じ用也べし。急なる時は

青松葉を嚼病人の口をあけて汁を吹込べし

按スルニ此方俗ニ云ヲ肩ヲ治ス項肩ノ卒ニ強急スルナリ癖疾ノ証ニハ用ユルニ非ズ又常ニ少ヅヽ骨強タル人多ク此方ヲ服スルヿナカレ早ケンベキナラハ世上ニ覺ヘタルゴトクツヾリタルトコロヲツヾミアゲテ淺クハコヽキリテ血ヲ出スベシ又兼テナタヽメノ實ヲタクハヘヲキ削粉ニシテ白湯ニテ用ベシ煎シテ用ユルモヨシ

ふの部 夜は婦人の病大概を記す。産前後ハさの部にくはし。

○月水定りなり早くハ血の實と知べし

国立国会図書館 タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

一 南坂 赤麦 川芎 青麦 白朮 陳茯苓 二麦
古葱し 用也
○月水久しく止らざるを治す
一 苟菜 香附子 黄耆 阿膠 各等分
古葱じ 驗あるまて用
○赤白帯下久くと渡らざるを治す
一 苟菜 香附子 艾莖 各等分
古葱用也。又粉にし塩湯にて用也
○赤白帯下年月を糎て止らぬを治す

一 聖裏散
干姜 青麦 香附子 青麦 甘草 川ノ
古粉にし飯の丸湯にて毎朝いかにも多く用
○又方
一 香附子を黒く炒て粉にし酒にて茶一服
かどづく毎日又六度も用也べし。血を調へ
崩漏を治し婦人の仙薬也 甘草か加へてよし
○又方
一 野に自然 生する白き鶏冠花 陰かし 又月

国立国会図書館 タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

の苦竹の筍取務にあたらぬ所に坐らるを
陰干にして二味等分黒焼にして炊湯にて用
○こしけの洗し薬
にごりだらさ そあ 巴豆二粒 仙人草三分
ならや かし 粉干れ肉まめ粒 各粉にし
○是かどに是し絹に包こ陰門にをし
入て蓋。糸を付股に結付し。三日に一度
とりかへ通し。黄なる所のごとく成拘ことく
く下る 其後内薬を用

○月帯下の妙方
一腰調散
白礬 硫黄 二種等分粉にし
藁を焼て灰汁となし。右の薬をねり指の
そさかどに堅め陰中へ入蓋。一日に二三度腰湯
すべし
○婦人月水久く不通口鼻より血出るを治す
一好京墨を水に磨て服すべし。其血立処に止る也。
内薬には当帰尾 紅花 各三匁 水一盃半入八

国立国会図書館 タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

分に煎じ服すべし経多即通す

○前陰へ蛇入るを出す

一物を染る藍を包こ出し多く用ゆべし

又藍玉をもちにても用ゆべし自出るなり

○産後前陰損し膣痛を治す

一車前茅　蘩蔞　接骨葉　各等分

右煎じ陰門を洗ふべし

○婦人万病妙方　血証　氣逆上　頭痛　氣虚　等によし

一川芎大　茵飯大　芍茱大　地黄中

肉桂中　白朮中　白茯苓中　黄蓍中

香附子大　人参小　蒲黄小　甘草小

右丸散煎湯にして用

○山田振茱　婦人血のこり手負によし

一人参　茯苓　茵飯　川芎　地黄

芍茱　黄芩　黄連　大黄　抵柳子

川骨　肉桂　白朮　丁子　桂心

木香　各等　甘草　以上十七味

絹に包こ振出し一日次第くに湯を熱すべ

産後には河骨一倍入。ふるひそり絶死等
によし。手負にも同前。脇暈血証に
て頭おもきに用てよし

○同振薬

一人参　茯苓　桂心　河骨　丁子各等分
甘草　かし　振おし用功能前に同し

○婦人こしけ治しかたきに用る方

一雄黄　白丁香　明礬　丁子　陳皮

宮粉にし合て七川に分包袋に入て陰門に
はさみ。度に付かへ通し七日が中に治るなり

○婦人故なくして小便に血出るを治す

一胡燕窠中の草を焼て来し。酒にて五分かと服す

○ふく病の薬　黄胖病なり

一大亀の肝を干かため粉にし薯蕷をおろし
て合●是かとに丸じ。蕎麦粉を夜に干かた
め。一度に十五粒つて其人の氣根により酒にて
歯にあたらぬやうに用ゆべし。薯蕷なくバ

葛の粉にて丸すべし

○つく病の妙薬　用ゆる数人悉効あり

一鐵屑　十三日　二三日水に浸し丸上三日をく

硫黄　十三日　細にわろし

蕨の粉　十三日　甘草　十三日

右四味粉にし廿一包にして一日に三度つゝ

酒にて七日に用ゆ　但し灸を忌

○同

一蕨の粉　百目　鐵屑　五日

鼈甲　但石龜の甲もはし　五日　唐蝋　五日

右粉にし酒にて用ゆ

○河豚の毒に碎ける薬

一橙の皮煎じ用ては其外一切の魚毒に効あり

○同

一酸漿草　其味　服してよし

○同　死せんとするを救ふ

一樟腦を粉にし白湯にて用ゆ

一河豚魚にあたり塩かつと喰合すれば忽

死すなり

○飛蚤の螫たるを治す

一甚不の土をたり。咥にて解付べし

○風毒膻の薬

一敗毒散に午蒡子を入用て効あり。風毒の見やうハ膻上り熱して赤きなり

○舩に碎ぬ薬　舩暈

一小角豆のからを酒に一歩浸し黒焼りし為にて用ゆべし

○同

一松脂を大豆粒かどに丸し三粒湯にて服して舩に素べし。すこしも碎るなし

○秘方舩に碎たる二用薬

此薬を用て舩に素バ碎ず

一鯨骨黒焼十匁　青皮五匁　木香五匁

枳殻五匁　丁子五匁　甘草五匁

右粉にし蜜にて煉。但し生姜を蜜にて蒸し生姜を去て其汁にて煉なり

○蔔蔔といふ疔を治す　腫抱ふとうのごとし

一此腫抱不時に出来急に治せざれば死する者あり。灸をすくともつくらず生の大豆を食するにかうばしきハ蔔蔔疔なり。蒜を黒焼にし糊に押まぜとく付べし忽瘥なり

按ニ此腫物田舎ニ生ズル人多シ。京師ニハ出ル者稀ナリ。足ノ指ノ間ナドニ發シテ形蔔蔔ノ如シ。是正宗ニ云蔔蔔疫歟今俗ニコレヲ治スルニ鐵火箸ノ類ヲ火ニテ赤ク煆アツサヲ覺ユルマテ腫物ニアテ、水出レハ愈

袋をれの妙茶　骨中にてわるなり

一小麦の粉　大　白粉　少し加へ

右白出茶の汁にて能く煉て付べし

或人ハコベノ異名トイフ

○腹痛を治する方

一凡人房事を通し内虚し寒に感じて肚痛者にハ胡椒十粒余粉にし色を焼酒一杯熱して飲べし。立処に効あり　按此方内虚感寒者ニアラズハ用ユベカラス

○心腹痛諸茶効あらざるを治する方

一蒲黄　微炒　五靈脂　各等分　細末し醋に浸し熬て膏となし。一二匙かど食前に

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

白湯にて用ゆ。又小腸氣痛を治す急し

この記 こしけの療治ふの記にあり。喉痺の記考へ合すべし

○喉痺喉風の吹薬

一 明礬 壱匁 土器に入て火の上に置て其熱る中へ蓮肉を皮心を去て入。煙出やむかど焼て粉にし管にて吹入なり。喉風にも鍼を立薬を吹なり。内薬にハ通氣湯に桔梗を加へ与ふ。通氣湯ハ柴胡 桔梗 人参 前胡 枳殻 独活 芎藭 甘草 各等分 煎服す

一 ○喉痺の薬

山豆根 壱匁 煎じ用。急なる時ハ振出し用ゆ。

一 ○喉風の薬

青木葉 粉にして管にて吹入る

一 ○口中乃薬

橙子を香の物に漬黒焼にし付へし。口中一切の瘡并に咽痛にもよし。咽痛にハ梅干の黒焼を加へべし

○口舌瘡を生し脣燥 咽乾 舌強縮

芎の証を治す

一防風　連翹　黄連　赤芍　生地
玄参　梔子　薄荷　桔梗　甸坂
川芎　山豆根　牛蒡子　甘草

右水を天目に二ちい入一盃に煎食遠徐に服

○同　口中一切によし

一乳香散

乳香　三ヶ　丁香　壹分かつ　紫檀　壹ト かつ
地黄　三ヶ　酒製　細辛　少ヶ　生　荷葉　黒焼

右細末して用ゆ

○歯をぬく茶

一脱歯散

川烏頭　三ヶ　単橙　少ヶ　細辛　四ヶ

右生にて粉にし歯の根にぬるべし。妙なり

○ゆるく歯を固る茶

一固歯散

石膏　壹斤　焼　青塩　四匁　白芷　少匁　細辛　壹匁

右粉にし歯に擦べし。痛を止。歯をかたむ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○口瘡舌破を治す

一 黄栢 皮を去 青黛 三五 蜜陀僧 三五

ともに細末し患処に摻しきらくにして吐去へし涎出て即愈

○咽喉腫痛飲み三日通ぜざるを治す

一 通喉散

桔梗 陳皮 香附子 荊芥 甘草 川芎

右つゝのごとく煮じ食後に服すべし

○咽喉腫塞呼吸通ぜざるを治す

一 苣薹 黒焼 粉にし 管を以て咽に吹込へし

○喉腫痛によし

一 吹喉散

藜 三五 南天葉 五分 昆布 五分

荷葉 三五 古粉にし管を以て吹べし

○口に瘡生しうるを治す

一 兼食散

細辛 黄連 等分

末となし。口舌をよくあらひ清め。右の粉末

と捻りかくべし涎出て愈

○咽口中に瘡生しうるを治す

一立効散

黄連三分　乾薑ゆ二分　甘草三分

右粉にし捻べし涎出て愈

○同方

一赴筵散

黄連　乾姜ずこし炒　細辛各等分

右細末し捻べし涎を吐て愈

○小児舌ゑとぎを治す

一辰砂　其味蜜にて和り付へし

○又方

一枯礬を多くたく足のうらに引へし

○歯をすゆる薬

一白礬十五　蒲黄生　二味細末し

ゆるぐ歯に付べし

○歯より血出疼痛を治す

一欝金散

鬱金　白芷　細辛　各等分

右粉にし付べし志むしくにして涎を吐て愈

○風牙を治する立処に効あり

一定痛散

細辛半匁　白芷　川烏頭各半匁　乳香半錢

右粉にしおづく切に歯に擦るべし涎を

おする。須臾にして吐おし塩湯を以て漱

灌すべし

○蛀牙漱菜

一苦参　防風　荊芥　芫花　花椒

各等分煮一取外に出し宝瘡牙を漱

○牙落復生る方

一雄鼠骨半斤皮を剝烟砂を以て肉をする三日

肉化して水となる骨を丸瓦上にて焙乾

香附半匁　蒲公英　川芎　地骨皮　川椒

桑白皮　白芷　川槿皮　早蓮草　香塩

ともに末とかし百日がる擦べし。其牙復生

○走る牙疳を治す

一黄柏生　小豆生等分　荷葉　一倍加へ

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230　ガラス使用

粉にし付べし

○齒くされ含葉

一蓮葉　地黄かし　黄連かし　唐竹葉七

古瓷じ塩かし入含む

○唇口裂大便秘結し瞼り口より涎

を流すを治す

一浮胃湯

大黄二五　葛根三五　桔梗

枳殻　芎胡　杏仁各五分

生薑を入煎じ用也

○神應固齒散　虫を殺し齒を固め白し身

燈まて齒の類なりしむ

一寒水石火煅　石羔煅各二匁　姜虫炒　食塩塊火煅

白蒺藜炒　破胡紙焙　獨活　白芷各二五

樟腦　雄黄　火硝各五　加羊脛骨火煅一匁

右細末磁に入よく〳〵蓋をしめ金毎朝齒をすり噙る

片時。漱々して吐。毎日かくのことしして怠る勿れ

○喉より血出るを治す

一生薑　甘草二味等分　末して湯にて用也

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230　ガラス使用

○口中含薬　万によし

一藜（ぐくろやき）　蕨（ぐくろやき）　昆布石付（くろ焼）

右絹につゝこうくこてよし

○大舌を治す　舌俄に大腫るあり是を俗に大舌といふ

一耳薬　是味蒸じて用ゆへし至て妙也

一耳薬　是味粉にし舌に付てもよし

○長舌　是舌也　舌大に腫かたくなをいふ

一黄柏　塩かし入蒸じ含咄出し乳香散を付へし

○同

一急に針をさて血を出し。米夏一味剉こ蒸し口を漱ぐ也し

○歯くさの含薬

一細辛　丁子　耳薬　各等分

せんじ嫩くむべし

○歯くさに血なくして痛に付薬

くちびるやふれいたむによし

口中やぶれさゞれたるによし

一蒲黄　即夜　桃柳子　是夜黒焼　大倍子　即分

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230　ガラス使用

細辛 三分 明礬 かし 右粉にし付べし

○同内茶

一 木夏 三分 枳実 かし 荊芥 三ト

芭蕉葉 五分 旋覆花 小車の花なり 青皮 かし

前胡 かし 麻黄 三分 黄栢 三分

犀角 三ト 甘草 かし 枳柳子 五ト 加へ

右煮じ切て用ゆ

○咽へ唐瘡出て痛に吹茶

一 阿仙茶 三分 白礬 三分 大倍子 三分

烏賊骨 五分 中色にいる 膽礬 五分

右粉にし咽へ吹入べし

○舌腫て口の中に満るを治す

一 舌の表方の尖に針を刺砂糖を塗てよし。又鶴鴿の糞を付てよし

○舌の上に瘡出又根にも治す

一 黄栢 黄連 各等分 明礬 かし

右粉にし付べし頰腫筋引にもよし

○同

一菖蒲 刻ミ好那にて煮じ服す
婦人乳おざりにもよし
○小舌乃菓
一吹喉散
藜 壹匁 蓮葉 卯分 南天葉 壹匁
昆布 壹匁 細辛 壹分 明礬 壹分
古名黒焼にし梅干の肉にて煉合せ●是
祇に丸して衣にハ 乳香散をかくへし
○含菓

一升广 金銀花 丁子 黒冬
青木葉 露蜂房 蓮葉 各等分粉にし
○口中臭氣を去
一丁子圓
丁子 三匁 川芎 四匁 甘草 各卯分 白芷 卯分
蜜にて弾子の大に丸し綿に裹含む
○同
一甜瓜子を粉にして蜜にて棗核かとに
丸し毎朝漱ぎて後一粒づゝ含へし

○口中一切の痛に薬

一生香附子　焙香附子　黒焼香附子　各等分

粉にして付へし

○口中一切の名方　口中万ニよし

一吹喉散

葛粉大　紫蘇粉大　天花粉大　的礬焼過し

耳薬粉小　硫黄粉小　目を用　桔梗粉

右調合し付へし

○上下の腮に瘡生じたるを治す

一髮落　古菅笠　二種焼て細末付べし

○又方

一梹榔子を粉にし白粉かし加へ付へし

○歯舌

一針を洗し血を出して皂角　荊芥　二味

を粉にし酢にて解合て付べし

○歯くさ　舌の上下腮より血出るを治す

一槐の花を炒て粉にし耳薬かし加へ

切に捻りうくべし

○口舌咽喉膣痛に含茶

一土竜黒焼大 訶藜勒大 柚核大 白礬焼かへし中

右細末し柿子の肉にてねり合絹に包こ

口中に含へし秘方也

○一切口中によし

一玄参散

玄参 升麻 羌活 山梔子

前胡 犀角 各等分

右蒸じ用

○小舌の茶

一金石散

人参生 川芎生 紫檀生

香白芷生 蓮葉生 各三ドつ

りし舌黒色になりてうらバ荊芥を加へてよし

○重舌の茶 俗に小舌といふ

一桑木 くろやき 丁子生 甘草生 人参生

蓮葉生 南天葉生 芋の莖 蕨 くろやき

各等分粉にし付べし

国立国会図書館 タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

○口中の菜 口中一切腫痛によし

一柘榴皮大 白礬 焼延中 丁子 かし

右粉にし。引菜一服かど良酒にてかきたて。

盃に二ッ入一盃に蒸し含暫して吐出 嗽

をすべし。歯の動にハ七分に蒸 鳥の羽にて

付べし。歯くさに引て愈。腫を吹やがらせしき

附ハ丹礬 焼かし 加へ

○馬牙疳 口熱 歯痛 歯齦腫

○蟲歯 鳥を治す

一外麻湯

外麻 丁香 青木葉 麻葉

右当のごとく蒸じ塩かし入含暫く当て

吐おす。外風邪あらバ荊芥防風を加へ

○歯くさを治す

一糞中蛆の蛻 黒焼 吹菜にす

○口中含菜

一蓮葉 青 露蜂房 青 丁子 青

青木香 青 外广 青 檳榔子 ミト

木瓜の木 蒸し塩かし入合べし

○乳香散 口中一切によし

一 紫檀 乳香 丁子

白檀 白礬 地黄 酒製し

沉香 南坂 酒製

右粉にす

○乳香散 口中一切によし

一 紫檀 白礬 丁子 藜

人参 蓮葉 川芎 細辛

乳香 甘草 以上十味

右粉にし付べし

○頬腫るを治す

一 土龍 良香 桑木の茸

甘草 白礬 各粉にし

頬のうらへ付べし 小舌にもよし

○歯冷て痛を治す

一 胡椒 良香 丁子 各等分 粉にし塗べし

○歯の根ゆるぎ痛を治す

一柳枝を挺 北骨皮 細辛 防風
杏仁 蔓荊子 生地黄 各等分
塩を入煎し。切て含て後吐おすべし

○歯の痛を治す

一雞の糞乃白を焼粉にして付へし

○同含菜

一青蒿を挺煎じ含へし立処に痛止

○蛀牙痛を治す

一丁子 蓮子 各等分 麝香 各等

皆丸し出くひ歯の
根にぬるべし

○腰痛を治す

一橘核 杜仲 酒に浸し炒絲を断去 各二十匁 細末し
二匁かどつて食前に熱酒に塩少入て呑
汁となし服す

○卒に色出ざるを治す

一杏仁 去皮尖 三分かし炒和げ肉桂乃
細末を分を加へ杵爛し杏の核の大さかど

に丸じ綿に包に合こてゆるくと嚥屋し

一日に五度一夜に三度用也

○瘤の薬　根秤かたきハこぶなり。上あハけて根の

按ニ癭瘤ニ五ツアリ。皆痰氣結シテ成ナリ。後ニ潰テ癰ノ如クナル者アリ。今俗ニコブト云ハ堅シテ潰ルコトナシ。是五癭ノ内ノ石癭ナリ。薛立齋五癭ノ説アリ可ニ考見ル

一　天南星　白粉　砒霜石

何れも粉にし瘤の上に三火灸して其上にそく飯にてねり付べし

○又方

一硫黄　白粉をそく飯にて付るもよし

○癭瘤の薬　砥掌散

一男女癭疾年久きも壬日に発るも皆効あり　海藻　黄栢二匁　細末しかつ手の中に置て度こ砥津液にて飲下すべし如癭三分の二ツかども消る時に薬を止る也

此方按ニ海藻ハ散結ヲ黄栢ハ降火ヲ

○瘤拔薬　蒲黄丸

一天南星　黄栢　蒲黄　辰砂　半匁

○香煎の名方

一 茴香 武五ヲ入レ　陳皮 五ヲ入レ　薏苡仁 十三ヲ入レ
山椒 四ヲ入レ　大冬米 十五ヲ入レ

右何色も焙にかけ粉にすべし

○腰痛を治す　生寄湯

脾肝二臓熱して腰痛。腎に邪熱入バ脛痠舌こもり或房事をして痛をなす也足膝かれ弱かてさくがごとくなるを治す

一 獨活 中　桑寄生 小　白芍藥 大　牛膝 大
當歸 大　防風 中　甘草 かし

右証にしたがひて加減すべし

○月 思ふべからざるを治す

一 速効散

川練子 肉を巴豆又川とも二赤色に炒巴豆をさる　茴香 塩炒て塩をさる
破故子 炒各壹十匁

右末となし毎服壹匁食前熱酒にて用

○氣滯腰痛腎虚腰痛を治す

小茴 炒　杜仲 姜汁に浸し炒　玄胡 炒　官桂
牽牛 半生半熟　茴香 炒各一匁　木香 五匁

右末し二匁にて空心に酒にて用　一方黒牽牛を去蒸し用也

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230
ガラス使用

ての部

○手負の内薬　金瘡の跡を世に手負といふ

一人参　川芎　茵陳　葛根　黄連
白朮　萍蓬　耳菓　大黄　各等分

加減ハ胴に血そまりたるか又ハ大便小便不通にハ大黄を倍べし。筋にたしにハ丁子抵柳子を加ふべし。虫さし出バ丁子を加ふべし。筋にたしれ口傳ハ新瘡の時用ゆれハ牽引てあしきなり。四十日程ゆを

蚤てあたへてよし

○手負の氣付秘傳

一青木の根を二月か八月かにとりて土氣を去白分に一日一夜浸し黒焼にして用ゆ飲汁　夏秋ハ分　春冬ハ湯にて用ゆ

○手負にも血止にも用る薬

一人参　白礬　茯苓　川芎　地黄

右五味の目かど青木の生葉を等分に合何きも黒焼にし葛粉を白く成かと

入調合し白湯にて用ゆ。血止にハ石の
葉を胡麻の油にて付べし
○手足を挫くるに付葉
一水仙花を根葉ともに黒焼にし梅干
に粘おし合て上に付へし
○又方
一芭蕉の根を粉にしてそく飯におし
合せ付べし
○手負の生死の見様

一白蛇の糞　蓮肉　何色も黄色に魚
目等分に合て一つく程な液ぬる湯に
て飲せ見るべし。活ざるハ葉をうけす
吐逆し。活るハうくるなり
○手負の口鼻より血おるを治す
一又加木を手一束に切て蒸し　百草霜
鬼の皮を黒焼にして合せ用べし
○手負の鼻血を止る
一蒲黄を湯にて用べし

○手負の血を吐を治す

一蘘荷の古根　甘草等分に合せ湯に立用ゆべし

○手足忽腫痛を止む

一手足卒に腫痛を代指といふ烏桕の核杵碎苦酒にて解腫ある指を其中へ漬し須臾して即瘥ものなり

○手負に能あいす

一聰るの屎　たゞ六月にとり小便に浸し亦こべのけに浸しまかハ黒やきまかハ黄

沉香　砂糖　山梔子　炒て　鹿角　人参　古粉にし童便にて用

○手負内茶

一白朝散

人参　川芎　木香　白朮

地黄　紫檀　香白芷　南坂

芍茶　陳皮　茯苓　石斛

沉香　甘草　川大黄　泄浮にハ入るへ

右つゝのごとく惹じ用

○手負内薬　黒くまり奇妙の方なり

一安平散

白芍嚢　眼子菜　古苧麻

河骨　麻頭　烏貝　各等分　くろやさ

酒をそゝぎかけ消　又童便にて消もよし

○手負久く血を吐不止　鼻尻よりも出るを治

一石菖根　粉にし　茸菓　等分　湯にて用べし

○手負　胴へ血の入るを下す

一胡椒　七粒　巴豆　壹粒　大黄　壹粒　丁子　少粒

縮砂　壹粒　●是程に丸しねる湯にて十丈　五

粒　用也へし　胴へ入る血小便下るなり

○手負の筋をさし

一蟹　川蜷　石決明

各黒焼にして酒にて用

○月付薬

一赤小豆　木香　竹の虫屎　各等分

古粉にし　胡麻油にても藁蔞の汁にて

も付べし

国立国会図書館　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230　ガラス使用

○手負血内へひき外へ出ざるを治す

一志のべ竹を焙り其あらゝまりを疵の口へ当れば其まゝ血外へ出るなり

○同

一石蒜の根　苦参と胡麻の油にて和付へし

○手足にまめ出又ハすりむけるを治す

一南天の葉を陰干にして粉にし付へし妙也

生にて付るもよし

○癲癇妙方

一肝虫湯

船座苔 又夜 松を云　苔棟根皮 五　楊柳皮肉

大黄　細辛　耳草

人参 各 壹匁　川芎 三分

右壹服にして茶椀にて三盃入一盞にして用二日魚鳥を食せず塩断をし其内にハ粥を用位し四十宵余の人ハ治し難し。小児にも十四五歳までハ半剤用。是を一日に服し終つく其晩より。たりれ下しを用ゆへし

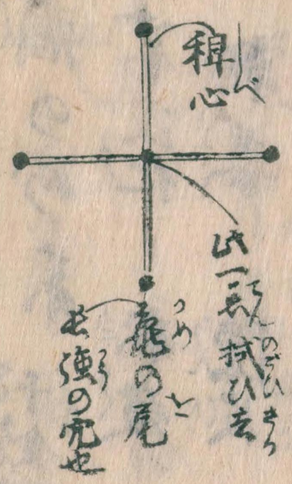
一巴豆 卦粒 油を去 川大黄 沉香 耳茶 各かし
古粉にし・是ゆどに丸し又七粒虚實を
考へ用ひへし 按此方脾癇面黄下利吐舌作羊吼者不可用之

○癲癇心風邪を治する奇方

一蝦蟆の黒焼辰砂等分に合せ細末し一五
つ水にて服す神驗あり

○同灸法

一大椎より長強穴龜の尾まで稈心をさけ其稈心
を二に折て半分を切すて折るの稈心を三に
折又一分をきりすて其折る二分の稈心を
長強の穴より上へ此がせ。其はづれに墨を付。
又二ツに折稈心の其中に墨を付。其稈心
を横にあてて其方に墨を付以上墨の点又処
其中の一点拭去て用ひず。長強ハ龜の尾也。
一穴に百壯。四穴に四百壯灸すべし。左の為を
見て考へ
べし



○癲痫の妙薬　千金勝寶丹

一　木香　茯苓　枳殻　雷丸　大風子を用ゆへから須
鶴虱　乾姜　陳皮　桔梗　各等分
甘草　枳榴皮　三分　使君子　等分
檳榔子　三分　牽牛子　三分

右粉にし葱乃白根一すじ入。甚煎し汁にて用也。男は八四五女は八三五也。用うち前後三日魚鳥を食せず。酢。酒。油氣。生菓。青き葉。菜。鳥を忌。菜用前の肩に煎じ。月星の影を

移し朝卯刻に用ゆ　按此方脾氣虚弱ノ人ニ用ユベカラス

○大人小児癲痫を治す

一　青黛散
青黛　紫胡　荊芥　白礬　川芎

右粉にしうす菜一服かとつて白湯にて用也

○同妙薬

一　人歯　卅三　牛歯　卅三　馬歯　卅三

右三色黒焼にして金箔卅三枚能粉にはし好菜の清にて度々用て効あり

○鉄炮に中里ふるを治する方

一天南星を粉にし其葉を濃煎じて付べし。若沙りて内爛れ焼むけて疼にハ蓼の穂を粉にし苦参黄栢粉にして加へひとと付べし。玉と沙りくるも拔るなり皮をくぬ目に見へバ汁にて破里おすべし

鉄炮疵にも三白散を付べし

一三白散ハ天花粉葛粉麻苧根粉にし胡麻油にて付べし

一疵深く薬底へ入ざるにハ蛇の脱を粉にし付薬に加ふ。于栗もよし

大日本獨案内　懐中折本大圖

此本ヲミレハ日本国中一目ニ見ユル○名所旧跡○神社仏閣○宿城下○三ナト等道筋ヨリミチチカミチ委シク記シ尤方角ヲ正シクシ一国宛ニテ色ヲカエサイシキイタシ見安クス

和漢算学啚會　全八冊

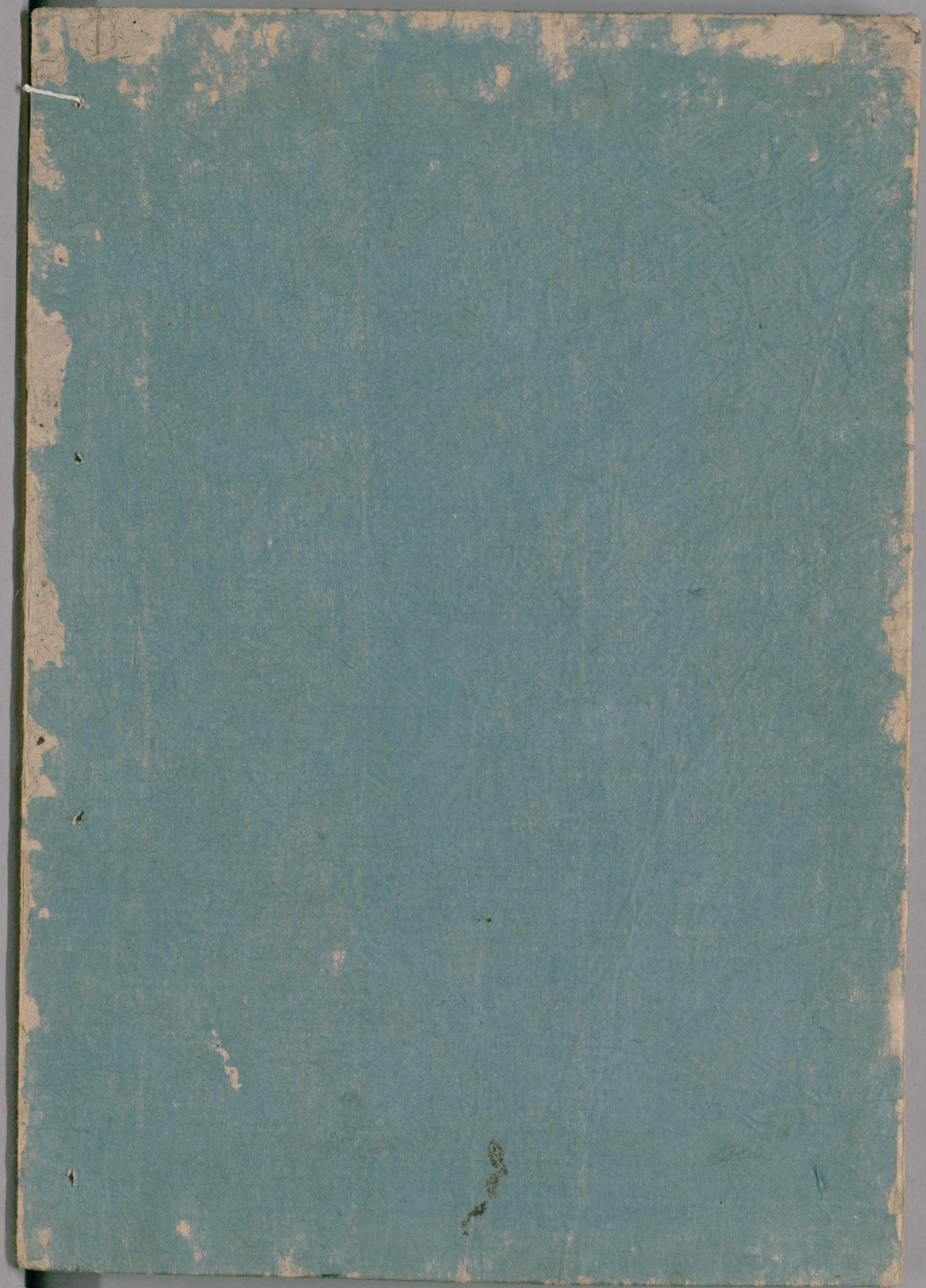
此書ハ八筭見一ヨリ次第シテ亀井筭天元術開平開立迄奥義口傳ヲアツメ繪啚ヲヤラハシ天地万物ノ筭数モルヽコトナシ

築山山水傳　全二冊

庭ノ作リ様ヒニ石ノ直シヤウ木ノウヱ様○座ヒノ仕様○ヱンスイ作リ様迄委シクシルス少シノツボ内ニテモ此書ヲ見テツクラバ家相ニモカナイ其家ヲ求ムベシ

女文章手引草　全一冊

女多ノ手本ニテ多ノ式法口傳入世間通用ノ文不残集メ貴人ヘ上ル多ヨリ下ツカタ迄上中下品ヲ分チ○三段カエシ五段カエシノ式○多ノフウジ様○進物書付仕様目録認ノヤウ迄集メ多ヲイロハ分ケニシテ○婚礼ノ多ハ同ノ部花見多ハ(は)ノ部ト申ヤウニワケル故クリ出シ見ルニ甚タ早シ其外女ケシヤウノ仕様ヨリ次第シテカミノツヤヲ出シクシカンザシ其外一切道具ノソンジタルヲ直シ様○衣服シミ物ヲトシ○染物仕様○紋ヒニロクロミタルヲ直シヤウ○料理献立指南○タキ物名香ノ方○色紙タンザク書ヤウ其外女ノ室ナルコト一切ヲノス



国立国会図書館　　タイトル『妙薬博物筌 7巻』 請求記号 特1-2230

ガラス使用